

Title	ドイツ三月革命における労働者階級の役割： カール・オーベルマン「一八四八年の革命におけるドイツ労働者」を読んで
Sub Title	The rôle of the German working-class in the March revolution of 1848 : treating of "Die deutschen Arbeiter in der Revolution von 1848", von Karl Obermann
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.6 (1958. 6) ,p.519(59)- 534(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19580601-0059
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580601-0059">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580601-0059</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

企業別実働労働者数 (単位人)

	29年	30年	31年
1	43,107	42,270	42,345
2	33,661	31,944	32,633
3	22,695	21,170	21,274
4	11,452	10,184	10,548
5	10,669	9,221	9,197
6	10,414	10,032	10,692
7	11,597	11,491	12,628
8	7,978	9,059	8,938
9	9,286	8,411	8,488
10	8,072	7,120	7,012
11	7,815	7,694	8,707
12	6,219	5,538	5,721
13	4,699	4,061	5,893
14	6,090	5,732	6,066
15	5,544	4,833	4,793
16	3,732	3,261	3,355
17	3,503	3,269	3,131
18	1,650	1,651	1,800

各年9月(実働労働者+臨時夫+請負夫)(通産省調)

企業別機械装置評価額(単位千円)

	29年	30年	31年
1	3,184,452	2,812,958	3,360,198
2	3,686,107	3,572,637	3,285,013
3	1,766,083	2,076,040	2,141,784
4	1,146,872	1,120,119	1,036,095
5	1,019,447	930,488	954,918
6	—	—	—
7	795,502	1,021,554	992,234
8	1,491,619	1,550,003	1,371,648
9	901,401	846,851	790,577
10	1,729,760	1,716,351	1,826,023
11	436,986	823,487	903,814
12	603,822	621,795	567,752
13	489,434	476,990	358,085
14	—	521,107	460,864
15	—	—	—
16	543,542	486,650	—
17	300,314	270,080	—
18	120,220	113,780	107,592

各年9月末 有価証券報告書

五八(五一八)

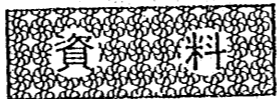
企業別粗出炭量(単位トン)

	29年	30年	31年
1	496,600	496,900	545,880
2	375,500	353,900	374,040
3	318,800	283,300	302,900
4	144,500	155,300	166,100
5	128,450	132,100	144,300
6	140,222	130,247	138,684
7	130,600	120,100	145,000
8	84,250	115,000	121,300
9	115,408	104,700	109,579
10	90,850	84,600	88,400
11	96,100	95,700	93,926
12	84,500	77,200	84,700
13	58,500	63,000	70,000
14	54,100	62,200	63,800
15	60,300	60,700	56,900
16	35,600	40,400	39,500
17	32,510	30,600	40,500
18	17,918	19,600	25,024

各年9月(通産省調)

〔後記〕

- (1) 本稿における生産函数計測結果は、大学院岩田曉一氏との協同作業によるものである。同氏に先立って本誌に発表させて頂く好意に接して深く感謝する次第である。
- (2) 多くの資料に関して常に最大の便宜を取り計らって下さり、且つ有意義な御指示を賜わったのは通商産業大臣官房調査統計部石炭統計調査室広田江二氏である。本稿が氏の御好意に応える一端となれば幸いである。
- (3) 生産の技術条件及び自然条件について、長期間にわたる実地見学の機会を与えて下さった常磐炭礦株式会社に深甚の謝意を表す。



## ドイツ三月革命における労働者階級の役割

——カール・オーベルマン「一八四八年の革命におけるドイツ労働者」

(Karl Obermann; Die deutsche Arbeiter in der Revolution von 1848, 1953) を読む——

飯 田 鼎

- 一、はしがき
- 二、十九世紀初頭のドイツ経済
- 三、三月革命以前のドイツ社会運動
- 四、三月革命の経過と労働者階級の役割

最近におけるドイツ社会運動史の研究が、まことにおどろくほど多彩であることは、ドイツで出版される書籍のカタログを一瞥するだけで充分である。われわれはいま、これらのゆたかな研究活動の成果について、充分な認識をもっているということを、確信をもって語ることはできないが、研究の大体の傾向についてはうかがい知ることができよう。

フリードリッヒ・マイネッケの言葉をかりるならば、「ドイツの

ドイツ三月革命における労働者階級の役割

五九(五一九)

歴史は、解きがたい謎と不幸な方向転換に富んでいる。この言葉は、かの第三帝国の二二年間における奇怪な体験を通じて胸に刻みこまれた一人の思想家の悲痛な叫び以上のものをもっている。世界において、もっとも古い歴史を誇った社会主義政党と最も強い共産党をもっていたドイツが、なぜ、ほとんどみるべき組織的抵抗もなしに、ヒットラーの軍門に下ったか。その理由は共産党のセクト主義や社会民主党の裏切りを指摘するだけでは説明としてはなはだ不十分である。このような視点から、戦後のドイツ民主共和国においては、ワイマール体制の崩壊とヒットラーの登場前後における労働者階級の運動をめぐって、多くの研究や資料が公刊されていることは当然といえよう。わが国においては、この時期を主題とした研究は、村瀬興雄氏の「ドイツ現代史」(東京大学出版会)や篠原一氏の力作「ドイツ革命史序説——革命におけるエリートと大衆——」

(岩波書店昭和三十一年)などが代表的なものとしてあげられよう。

一九一四年から一九四五年までのドイツ現代史は、たんに社会連動史のみならず、社会思想史や政治史の研究者にとっても、見逃すことのできない好題目であろう。この激動の三〇年間に、ドイツの社会主義運動は、まれに見る革命的昂揚とこの上もないみじめな敗北をとげたのだが、この深刻な体験に教訓をえて、革命的な運動における政治的指導の点に、関心がむけられている。その結果として、この時期における革命的な指導者の役割をいかに評価するかという点も、最近の研究方向を示すものであろう。カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルク、エルンスト・テールマンやクララ・ツェトキン、あるいはフランツ・メーリング等の著作集や演説集、そしてその追憶や伝記書が、盛んに出版されているのは、これを裏づけている。

しかしながら、ドイツにおける民主主義と社会主義のための闘争が、敗北に終わったという事実、この国においてブルジョア民主主義革命がきわめて不徹底な形でしか行われなかったという歴史的な制約の帰結でもあった。かくしてブルジョア革命として一八四八年の革命が注目されることはいうまでもない。われわれは最近、これについていくつかのすぐれた研究に接することができた。たとえば、ゲルハルト・シルファートの「ドイツ三月革命の研究」や、ここにとりあげたカール・オーベルマンの「一八四八年の革命におけるドイツ労働者」、おなじくオーベルマンの「共産主義同盟の歴史」

などをあげることができよう。フランスにおこった二月革命のドイツにおける影響、民主的選挙権闘争の勝利と敗北については、すでにマルクスおよびエンゲルスが、燭眼をもってこの革命の推移を描写していることはいうまでもない。

ドイツにおける三月革命については、従来われわれはいくつかの研究をもっている。たとえばハンス・ブルムの「一八四八年—一八四九年のドイツ革命」(Hans Blum; Die deutsche Revolution 1848-1849, 1949)、ヴァンテンの「一八四八年—一八四九年のドイツ革命の歴史」(Veit Valentin; Geschichte der deutschen Revolution 1848-1849, 1980) また最近ではルドルフ・シュターデルマンの「一八四八年の革命の社会および政治史」(Rudolf Stadelmann; Soziale und politische Geschichte der Revolution von 1848, 1948)、ウィルヘルム・モンツェンの「ドイツ市民階級の能力とその限界」(Wilhelm Mommsen; Grösse und Versagen des deutschen Bürgerturns, 1949)などがあげられる。しかしながら、これらの研究に共通して見られる欠陥は、三月革命の過程において、労働者階級の果たした役割が、正しく評価されていない点である。

これについてシルファートはつぎのように述べている。「これらの労作は、多かれ少なかれこの意義深い事態を見逃している。これらの著作は、普通平等選挙制度施行のための人民大衆の努力を根本的には討究しないままであったから、ブルジョア自由主義者が普通平等選挙権を主張したというような誤った見解がしばしば述べら

れたことは、おどろくにたりない」と。そして、オーベルマンについてつぎのように評価している。「オーベルマンの著作は、この問題にかんするかぎり、労働者、とくにそのもっとも進歩的な分子が、民主的選挙制度の獲得運動に決定的な寄与をしたことを示している」と。

一八四八年のドイツ三月革命の研究が、現在、ドイツ民主共和国において、新たな課題としてとり上げられつつあるとすれば、それは、最近のドイツ社会連動史の研究傾向のいちじるしい特徴のひとつとはいえないだろうか。筆者は、オーベルマンのこの業績に以上のような意義を認め、できるだけ詳細に論評を試みようとするものである。

(1) フリードリッヒ・マイネッケ「ドイツの悲劇——考察と回想——」矢田俊隆訳、弘文堂、序言。

Friedrich Meinecke; Die deutsche Katastrophe—Betrachtungen und Erinnerungen, 1946.

(2) 岩波講座「現代思想」第五巻「反動の思想」二七。

(3) 寡聞な筆者が最近入手したもののうち、主なものは左のようなものである。また伝記的なものは、W. Pieck; Karl Liebknecht, der Freund und Lehrer der Jugend, 1949. Eissner; Rosa Luxemburg, 1952, Luise Dornemann; Clara Zetkin, ein Lebensbild. Irma Thälmann; Erinnerungen

an meinen Vater, 1955. Thomas Höhle; Franz Mehring, sein Weg zum Marxismus, 1869-1891, 1956. などである。

また資料は膨大なものが数々刊行され枚挙にいとまがない。Jürgen Kuczynski; Der Ausbruch des ersten Weltkrieges—und die deutsche Sozialdemokratie, Chronik und Analyse, 1957. Leo Stein; Die Auswirkungen der ersten Russian Revolution von 1905-1907 auf Deutschland. 2 Bde. Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. 2 Bde. Karl D. Bracher; Die Auflösung der Weimarer Republik, 1955. Erick Eyck; Geschichte der Weimarer Republik, Vom Zusammenbruch des Kaiserturns bis zur Wahl Hindenburgs, 1957.

(4) わが国におけるドイツ社会連動史もしくは労働連動史の研究は、未だ未開拓といっても過言ではない。村瀬・篠原両氏の業績のほか、落木正道「ドイツ共産党史」(弘文堂、昭和二年)、小此木真三郎「フランスの誕生」(青木書店、昭和二年)、吉村勸「ドイツ革命連動史」(青木書店、昭和二年)などがあるが、いずれもフランスを対象としたものであり、局部的な研究である。また故河合栄治郎教授の「独逸社会民主党史論」は興味深いが、体系的なものとはいえない。

(5) Gerhard Schilfert; Sieg und Niederlage des demo-

Krafschen Wahlrechts in der deutschen Revolution  
1848-49, 1952.

ゲルハルト・シルフアート「ドイツ三月革命の研究」上杉重  
二郎、伊東勉共訳、日本評論新社。

(9) Karl Obermann; Zur Geschichte des Bundes  
der Kommunisten 1849 bis 1852.

(7) Friedrich Engels; Revolution und Kontinuität  
von Deutschland, 大月版「マルクス・エンゲルス選集」  
第四巻所収「革命と反革命」

(8) シルフアート、前掲訳書、二一三頁。

二

一八四八年のドイツ革命がはじまる以前のドイツすなわち、十九世紀初頭のドイツが、どのような社会的経済的背景のもとにあったか、オーベルマンの主張を要約しながらのべてみよう。

「一八四八年以前のドイツにおける経済的発展の正しい評価は、その政治的過程の正しい処理のための前提である。ブルジョア的な経済史家は、十九世紀最初の三分の一期——すなわち関税同盟の締結までの時期——におけるドイツの状態とドイツ経済は、単一の経済圏の欠如(„die Unaufindbarkeit eines einheitlichen deutschen Wirtschaftsgebietes“)によって決定づけられたことを承認しなければならなかった。」(S. 6) ゾンバルトをまつまで

ちうるほどに大きく強くなることです……これは国民の関心事でもあり、全ヨーロッパの関心事でもあります。ドイツは古い、崩壊し腐朽した諸形態をもってしては維持されません。そんなことをするのは、古い騎士城や城壁や塔でかためられた都市の廃墟の上に、軍事的人為的な国境の組織をうちたてようとするにはほかなりません」。

経済的に四分五裂の状態にあったドイツ連邦は、関税障壁によって資本主義的発展への途をはばまれ、各地域がいずれも固有の経済をいとなみ、封建的な束縛が根強かった。従って一八四八年までのドイツ工業は、手工業に基礎をおく小規模生産が支配的であった。そして資本主義的大工場制度は例外的で、当時のドイツにおける資本主義的生産の型は、手工業と機械制大工業との中間的型態(Zwischenstadium)をなしていたといわれる(S. 6)。商人もしくは工場主のために働いていた労働者は、手工業の親方(Handwerksmeister)であるとともに独立小生産者であった。商人にたいする実質的な従属化と没落の過程を通じて、手工業親方のなから賃金労働者が生まれたのであった。従って関税同盟の成立によって、一八州、すなわち三四二〇〇平方キロメートルの面積と二三〇〇万の人口を有する地域が、ひとつの経済圏となったことは、ドイツの資本主義発展史上に特筆されなければならない。しかし、ドイツにおける資本主義の発展は、まことに遅々たるものであり、その状態は実にみじめであった。「ドイツの労働者階級の社会的政治的発達がいギリスやフランス三月革命における労働者階級の役割

もなく、十九世紀初頭におけるドイツ経済の分裂状態は、政治的には、ドイツが相反する傾向と気まぐれをもつ三六人の王侯のあいだにでたらめに分割されていたこと、すなわち大小さまざまな独立の王国、公国、大公国、自由都市から成りたっていたこと(2)の反映にほかならなかった。それは、生産力の発展とブルジョア階級の運動にとつて耐えがたい桎梏として作用し、貴族支配の強化、封建的土地所有者の勢力の維持、従ってブルジョア階級の封建的貴族への従属化に役立ったのであった。まことにクチンスキーがのべているように、「十九世紀のドイツ・ブルジョアジーの歴史は、彼等が経済上の利益を得る代償として、政治上は依然ユンカーの下僕たるに甘んじたことを特徴としていた」(3)のである。

しかし、資本主義の発展とともに、国民的な単一経済圏の創出のための要求が強まってきた。開明的な貴族的改革者シュタイン男爵は、エルベ河以東の土地貴族にはげしい憎しみと侮蔑をこめて、つぎのように書いた。

「私にはただひとつの祖国しかありません。それはドイツです。そして私は古い国制にしたがえはたこのドイツに属し、ドイツのいかなる特殊な一部に属するものでもないのです、また心のすべてをもって服するのはただドイツであり、そのいかなる特殊な一部でもありません。この偉大な発展の刹那において、諸王家などは私にはまったくどうでもよいのです。それはただ道具にすぎません。私の願いはドイツがその自主、独立、国民性をふたたびか

ンスの労働者階級におくれていることは、ドイツのブルジョアジーがいギリスやフランスのブルジョアジーよりおくれているのと同様である……ドイツでは労働者階級の多数は、イギリスがそのりっぱな標本を提供しているような近代工業貴族にやとわられていたのではなかった。彼らをやとっていたのは小手工業者であって、これらの小手工業者の全製造組織は、中世のたんなる遺物にすぎなかった」(4)。つきにかかげたのは、関税同盟国家において織物業に従事していた労働者の構成をオーベルマンの説明によって表にあらわしたものである。

労働者および 織機の数	織機	労働者	備考
企業型態			
家内工業	五五、八五	七五、七五	上の数字によれば一〇八〇、〇一二人家
マニユファクチュア	二七、三六	三五、三七	族すなわち、約四、〇〇〇人が機械織業で生活していたことになる。
合計	八三、二一	一一〇、一三	

また一八四六年の終りのプロイセンにおいては、  
親方、技術工その他……四五七、三六五  
(Meister, mechanische Künstler und andere Personen)  
徒弟および見習……三八四、七八三  
(Gehilfen und Lehrlinge)  
計……八四二、一四八

そしてこの八四二、一四八のうち、五五一、二四四人がマニユフ

「ファクトリーおよび工場 (Werkstätten der Manufakturen und Fabriken) で働いていたといわれるが、そのうちわけはつぎのようであった。

産業の種類	労働者及び工場	労働者	工場	一工場当りの労働者数
織物業	二六九、二三八	二、七二八	一〇〇人	
金属工業	一〇〇、一九六	一、二六、九九三	八人	
製粉業	五七、七五八	三七、八六〇	二人	

これを見てもわかるように、織物業以外の工場の規模は小さく、大衆が零細企業であったことがうかがい知られる。

当時、資本主義発展の道標ともいえるべき製鉄業は、またその黎明期にあり、ドイツ経済の支柱をなしているものは、十六世紀以来の国内労働を主とする織物業であった。一八六〇年のベルリン統計局の調査によれば、一八一六年から一八四七年までの間、工場労働者 (Fabrikarbeiter)、手工業の職人 (Handwerker-gesellen) および召使 (Gesinde) の数は、人口増加率よりも六・八パーセント高く、手工業の職人は、五〇・六パーセント、工場労働者は一七〇・四パーセントも増加した。

一方、ベルリンの人口は、一八一五年から一八四七年までに一八〇、〇〇〇人から四〇〇、〇〇〇人に増加し、そのうち四〇、〇〇〇〜五〇、〇〇〇人が工場労働者および賃金労働者 (Tagelöhner)

その上一八四八年以前に完成されなかったもので、ドイツ商人は、商品生産の発展のために、封建的な隷属のもとにあった農民を、国内労働者としてひき入れ、もしくは手工業者を従属的な関係に強制しなければならなかった (S. 23)。それならば、ドイツ資本主義の後進性を特徴づけた農業における生産関係はどのようであったらうか。

ドイツにおける資本主義の発展は、「生産者の一部のみならず資本を蓄積し、商業を営み、ときがたつにつれて、ギルドの手工業的規則から解放された資本主義的な基礎のうえに、生産を組織する」という「真に革命的な途」をたどるのではなく、「直接生産者たちの状態を悪化させ……旧来の生産様式の基礎の上で彼等の剰余労働を取得する」といういわゆる「プロンヤ型」を形づくっていた。すなわち、一八〇五年から一八〇七年にかけて、ナポレオンのフランス軍がドイツに侵入して、プロイセン領を占領したことは、ドイツの運命に大きな転換をもたらした。プロイセンの封建的反動的体制は打ち破られ、新しい自由の風がふきまわって、農奴隷の廃止とツェンフトの解体が急速に進行していった。さきにも述べたシュタインやフンボルト兄弟をはじめ、ハルデンベルク、グナイゼナウそしてフイヒテなどの進歩的な人々の運動がたくましくつづけられ、資本主義的生産力の発展をばむ封建的桎梏からの解放が叫ばれるに至った。このような外からの条件におかれて、プロンヤ政府は、一八〇七年十月九日、勅令によって世襲農奴制を廃止した。しかしそれは、農民が人格的自由を獲得するのを規定しても、彼等の政治的権利の

ドイツ三月革命における労働者階級の役割

もしくは商店の店員 (Kaufmannslehrlinge) であった。またそのほか二〇、〇〇〇人の手工業の徒弟 (Handwerkslehrlinge) がいた。工場労働者の数は至って少なく、一八四三年一の機械制工場と約一、〇〇〇人の労働者がいたにすぎなかったが、一八四六年には工場の数も三三と三倍になった。ベルリンの繊維産業は、三三の紡績工場ほかに、九五の織物工場、二二のキャロコ捺染工場、三五の絹織物工場が見られたが、劣悪な労働条件に喘いでいた (S. 15)。これを要するに、十九世紀初頭から一八四八年以前のドイツ経済の支柱は、鉄鋼業よりは軽工業とくにリンネルおよび毛織物業であった。しかも重要なことは、そのなかで国内工業が重要な地位を占めていた事実である。一七八五年、一六五、〇〇〇人の労働者が資本家的企業に雇用され、そのうち一五〇、〇〇〇人がリンネル、絹および毛織物業に従事していた。彼等は年間六三、〇〇〇、〇〇〇マルクから九一、〇〇〇、〇〇〇マルクの商品を生産していたが、これらの労働者の多くは、問屋制家内工業の劣悪な労働条件に悩んでいた。そして一七八五年から一八四八年までの間に、国内労働者の数が非常に増加するという、イギリスなどは正反対の現象がおこったことは注目されなければならない。「農業生産者の生産手段からの遊離の過程は、たとえばイングランドにおいては、商品生産者の全体的な収奪過程の基礎、つまり本源的蓄積ないし産業発展の基礎を形成したのだが、ドイツにおいては、大体においてそれは、ブルジョアジーのためではなく、貴族のために行われたのであり、

獲得や物質的保障、とくに土地所有の問題については、何らふれるところがなかった。進歩的な政治家シュタインが追放されたのち、一八一一年九月所有関係に関する勅令ができたが、これによれば土地所有者にならうとする場合、永代賃借人は耕地の三分の一、農奴の大部分を占める永代でない賃小作人は、耕地の半分を手放さなければならなかった。

かくして一八〇七年以後、フランス革命の影響のもとに、「上からの改革」としておしすすめられた「農奴解放」は、資本主義的生産様式をとりいれた「ユンカー経営」を発生させるにもっとも好都合な条件をつくり出した。ブルジョア的な改革は、上からおしすすめられたけれども、封建的ユンカーは依然として政治の実権を握る者であり、農業プロレタリアがつくりだされたとはいえず、それは資本主義的ユンカー経営に吸収されるべきものとなった。このようにして、プロイセンにおいては、封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行が、クチンスキーの言葉をかりるならば、「政治という太陽の灼熱の光を恐れた経済革命であり、政治革命という清めの恩寵のなげがれた受胎」とでも云うべきものであった。そしてここにこそ、一八四八年のドイツ三月革命がおこらざるをえない理由があった。

(1) Werner Sombart; Die deutsche Volkswirtschaft im neunzehnten Jahrhundert, 1909.

(2) Friedrich Engels; Revolution und Konterrevolution.

邦訳マルクス・エンゲルス選集(大月版)第四卷二二頁。

(e) Jürgen Kuczynski: Die Bewegung der deutschen Wirtschaft Von 1800 bis 1946, 1948. 高橋正雄・中内通明訳「ドイツ経済史」五三頁。

(4) Alexander Abusch: Der Irrweg einer Nation, 1951.

道家忠道・成瀬治共訳「ドイツ——歴史の反省」七八頁。

(5) エンゲルス「革命と反革命」九一〇頁。

(9) Karl Marx: Das Kapital, Bd. 3. 高島訳(三ノ上)二九三頁。

(7) クチンスキー、前掲書、邦訳三四頁。

(8) 右掲書、三五頁。

(9) 右掲書、四四—四五頁。

三

ドイツにおける三月革命がどのようにして勃発したか、そしてそれはどのような経過をたどったか、とりわけ労働者階級がどのような役割を果たしたか、この点についてふれる前に、われわれはその前史ともいべき十九世紀初頭のドイツ社会運動について概観しなければならぬ。

封建的な桎梏にわざわざいされ、資本主義国としての出発点においてイギリスより半世紀もおくれたドイツでは、ブルジョア階級の力はきわめて弱く、封建的大土地所有者としての貴族(Junker)を

頂点として、その藩屏としての牢固たる官僚組織と軍隊とにさええられていたため、イギリスには十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて、すでに産業革命がおこって、新しい権力の担い手としてブルジョアジーが自己のイデオロギーをひっさげて歴史の舞台に登場しつつあったのに反し、ドイツ絶対主義政権は安逸の眠りを貪ることができた。カント、フイヒテ、シェーリングをしてヘーゲルとつらなる絢爛たるドイツ理想主義の哲学、そして「自由はゲルマンの森から生れた」と叫びしめたゲーテ、シラーおよびレッシングの情熱的な詩や文学、そしてバッハやベートーヴェンによって代表される古典的な音楽芸術とはまったく対照的に、ドイツの市民階級はその経済的発展の停滞に苦悩しなければならなかった。すなわちドイツにおける資本主義的発展のたちおくれは、ブルジョアジーをして封建的大土地所有者たるユンカーの下僕としての地位に甘んぜしめると同時に、階級意識に目覚めた近代的なプロレタリアートを創出するのをさまたげたのであった。かくしてドイツにおいては、十九世紀に至るもなお労働大衆の多くはプロレタリアートであるよりは小商工階級によってしめられ、しかも彼等は、イギリスにおけるような産業資本家に雇用される近代的なプロレタリアートではなかった。従って十九世紀初頭におけるドイツの社会運動が、近代的なプロレタリアートの運動というよりは、いちじるしく手工業者的な色彩をおびていたことはやむをえなかった。ウィルヘルム・ワイトリングの社会主義はこのような十九世紀初頭のドイツの経済社会を反映

して、あくまでもドイツ的であったといえよう。すなわち都市の手工業は中世的なツンフトの統制下にあったが、中世的な遺物としてのこのツンフト制度は、ドイツの産業的發展を阻害し、また嚴重な徒弟制度によって、年若い徒弟は親方になるためには一定の修業期間を終えたのち、ドイツ国内はもちろん遠くスイスやフランスまでも遍歴することを強制されたのであった。親方になる望みの薄かった彼等は、その巡業の途中で社会主義思想の洗礼を受けたことも珍しくなかった。ワイトリングの如き空想的社会主義者がすなわち、それであった。当時のドイツは、フランス革命の思想に影響せられ、また反動的なプロシヤ政府に弾圧されたため、社会主義運動はフランスを中心に行われていた。すなわち一八三三年、パリにドイツ追放者同盟(Deutsches Bund des Geächteten)がつくられたが、一八三六年にはその分枝として正義者同盟(Bund der Gerechten)が生まれた。これは急速に発展し、一八三九年までにフランス等の影響を受けた秘密団体、四季協会(Société des Saisons)のドイツ支部となった。彼らはバブーフの共産主義にもとづき、私有財産の廃止をとんでいたが、ワイトリングもバブーフの影響を受けたといわれる。彼はドイツにおける最初の空想的社会主義者ではあったが、サン・シモンやフーリエとはちがって階級的立場をはつきりと把握していたといわれる(SS, 50-51)。カペー、ルイ・ブラン、ブルードン等の一連の社会主義者は、それぞれ一八四〇年代になってようやく労働運動と社会主義とを結びつけたのだが、ワイ

トリングはすでにその前に階級的な世界観に到達していた。「人類の現実と理想」(Die Menschheit, wie sie ist und sie sein sollte, 1838)および「調和と自由の保障」(Garantien der Harmonie und Freiheit, 1841)の二著において、彼は自己の社会主義思想を体系づいたのであったが、彼の思想の空想的性格は、近代的なプロレタリアートをもって革命の担い手たることを洞察することができなかった点にある。彼の社会主義思想の根底に流れていたものは、依然としてバブーフの平等思想であり、またキリスト教の影響とりわけ福音主義的な傾向が見られた。結局彼は、手工業プロレタリアとして、ユートピアン社会主義とプロレタリア社会主義との中間的過渡的な地位をしめていたのであって、マルクスの門の前まで辿りつきながら、去ってフランスの空想的社会主義者の前に膝を屈したともいえよう。

それにもかかわらず、正義者同盟とワイトリングは、一方において自由主義的なブルジョアジーと、他方において手工業労働者によって建設されたスイスおよび労働者の啓蒙的な団体、労働者教育協会(Arbeiterbildungsverein)にも影響を及ぼした。やがて、各地に散在する教育協会をもって国際的なものにしよとする動きが見られ、一八四七年の夏ロンドンにおいて第一回大会が開かれた。この会合によって共産主義同盟(Das Bund der Kommunisten)が建設され、これによってマルクスおよびエンゲルスの科学的社会主義が、ワイトリングやブルードン等の空想的社会主義を圧倒した

ドイツ三月革命における労働者階級の役割

のである。当時のドイツにはワイトリングの空想的社会主義、マルクスおよびエンゲルスの科学的社会主义のほか、モーゼス・ヘス (Moses Hess) やカール・グリュン (Karl Grün) によって代表される真正社会主義 (der Wahre Sozialismus) という一派があったが、彼等は、マルクスと同じくヘーゲル左派に属し、空想的社会主義から影響をうけた。だが観念論を清算することができなかったため、次第に科学的社会主义にとって代られるに至った。

このようにして、上からの、労働者にたいする社会主義的啓蒙と宣伝が活発化するに従って、労働者階級の側からの運動も目立ってきた。とくに一八四四年、シレジアの手織工が問屋からうけていた残酷な搾取に対抗するため、暴動をおこし、また同年、ボヘミアの更紗染工は、多くの都市でやはり暴動に起ち上り、警察と軍隊によって弾圧されたけれども、これらの蜂起は、支配階級に大きな衝撃をあたえた。脆弱な基盤の上に立つドイツの産業ブルジョアジーは、これらの事件に驚愕すると同時に、これが対策を真剣に考えたことはいままでもない。すなわち一八四四年十月、ベルリンで関税同盟国の会議が行われたが、その席上、産業資本家の間から、「手工業および工場労働者福祉協会」(Vereins für des Wohl der Hand- und Fabrikarbeiter) 建設のよびかけが行われた (SS, S. 156)。おくれたドイツでも、もともと早く資本主義的發展が見られたラインランド地方では、一八四〇年代には労働者と資本家との間の闘争が次第にはげしくなり、すでに相互扶助的な教養的な団体

年	一八四四年	一八四五年	一八四六年	一八四七年	一八四四年から一八四七年までの増加率
親方	100	134	135	185	0.85
職人	3,374	9,306	15,608	19,361	5.21
合計	3,877	9,440	15,743	19,546	5.07
親方と職人の比率	37	49	81	105	2.83

による。

この表によって明らかのように、会員全体の数は、この四年間に五倍しか増加しなかったし、また親方の会員数もほとんどみるべき変化がなかったにもかかわらず、職人の会員の数がいちじるしい膨脹を示しているのは、彼等の生活条件が急激に悪化し、そのために団結への意識が目覚めた結果を示す何よりの証拠ではないだろうか。そして、これらの会員のなかから、シュテファン・ボルン (Stephan Born) やフリードリッヒ・レスナー (Friedrich Lehner) などの労働運動の指導者が現われたのである。

このようにして社会主義運動は、空想的な要素をおびながらも労働者大衆に浸潤し、やがてマルクスおよびエンゲルスの科学的社会主義が登場するのであるが、一八四八年のドイツ三月革命そのものは、労働者階級や小ブルジョアおよび開明的なブルジョアジーあるいはまた中小商工業者などの広汎な大衆によるブルジョア革命として勃発したのであった。革命の進展とともに各階級の利害の対立は

ドイツ三月革命における労働者階級の役割

(Gegenseitigen Hilfs- und Bildungsverein) が発展していた。カンパウゼン (L. Camphausen) のような開明的なブルジョアジーは、この労働者の自主的な運動に努力したが、これがやがてシヤンパン主義的な脅威となることをおそれた多くのブルジョアジーは、労働者の加入をさまたげ、その会員をできるだけ少なくするために、会費年額一〇グロッシェン以下の場合には、その設立を認めないことを公言した。

これらがやがて、さきにもべた国際的な結びつきを有する共産主義者同盟のための下部組織となったのであるが、個々の組織自体のそもその目的は、会員相互の教養をたかめることにあったのである。だが家内工業の没落と手工業労働者の低下する生活水準の結果、会員のうち手工業職人 (Handwerksgesellen) のしめる比率が次第に多くなっていった。すでに一八四〇年にはベルリンにおいてこの種の運動が見られたが、一八四五年、ハンブルグの労働者教育協会 (Bildungsverein) は、四五二人の会員を擁しており、その加入者の職別の主なものはつぎのとおりであった。すなわち、家具師一九七、左官一四、裁縫工三二、大工九、旋盤工二二、金細工師六、鋸前師一七、印刷工五その他であった。翌一八四六年には、このような労働者の組織はマグデブルグ、オルデンブルグ、ライプツィヒ、マンハイムなどに生れたが、マグデブルグの手工業労働者協会 (Handwerkerverein) を例にとると、会員のうち親方と職人の比率はつぎの表の通りであった (数字は K. Obermann: S. 61

どのようなにあらわれてゆくか、革命の成果を擁護しようとする側と、革命勢力の進出をおそれ、ヘゲモニーがその手におちるのを警戒し、今までの敵、封建勢力と妥協し、ひたすら反動化してゆく階級、そしてまたこの両者のはげしい階級闘争の間を浮動する階層との関係、なかでも革命の発展過程において、ドイツの労働者階級はどのような役割を果たしたか、この点についてオーベルマンの見解を中心に考察することしよう。

(一) Franz Mehring: Karl Marx, Geschichte seines Lebens, 1933. 栗原佑訳第一巻一五六—一五七頁。

ワイトリングはブルードンとともに、最初はマルクスに高く評価されていたにもかかわらず、結局、ドイツの手工業職人以上にでなかったといわれる。

四

「ドイツのブルジョアジーが反政府の旗幟をまきらかにしたのは、一八四〇年に、すなわち一八一五年の神聖同盟の創立者中の最後の生残者であったプロシヤの先代の国王が死んだときにはじまるといつてよいであろう」。エンゲルスがのべているように、一八四〇年代のドイツのブルジョアジーは、老朽化して打ち破るよりほかに救いようのないプロシヤの制度に絶望し、何よりもドイツの統一と、貴族およびドイツ連邦議会との協定の途上において、出版及び集会

の自由を得ることを期待した。しかし彼等は、漸進的な合法的な発展を望んだけれども、革命を望んでいたのではなかった(De Smet)。当時のプロシヤの状態を階級関係をもってあらわすならば、(一)国王を中心とする特権的な大地主および封建貴族、(二)新興階級としての産業ブルジョアジー、(三)彼等は封建勢力に対決する力をもたなかったけれども、封建遺制を耐えがたい桎梏と感じていた。(四)中間階級としての中小工商业者、(五)彼等は革命的な闘争にあたって決定的に重要な役割を演じた階級であった。ドイツは資本主義的発展がおくっていた結果、都市にはブルジョアジーと工業労働者、すなわちプロレタリアートとの間に介在する独立自営の手工業者や小商人が数多く住んでいた。(例)工業、プロレタリアート——近代的な紡績工場や織物工場、あるいははじまったばかりの金属工業などに雇われていたが、その数は比較的少なかった。(例)職人および徒弟——近代的な工場に雇われていた少数の工業労働者を別とすれば、労働者階級の大部分は手工業労働者であって、ツンプト的な支配のもとにあり、徒弟と職人、職人と親方との関係は、身分的な制度によって拘束され、また職人から親方になる途は、次第に狭められていった。(例)農民——この階級は複雑である。エンゲルスによれば第一に幾人かの農業労働者を雇用する比較的富裕な農業経営者、すなわち大農および中農(Gross und Mittel Bauern)と呼ばれる階級、つぎに、フランス革命の影響のもとに、主としてライン州に誕生した独立の小自由農があったが、彼等は封建的負担を金で買ったため、自由と

フランス革命を不徹底に終わらせるに至った大きな原因のひとつでもある。さて革命のそもその発端は、フランスの二月革命の影響によって点火されるのであるが、その前兆は、すでに早くからおこっていた。

労働者の種類	農業における賃金労働者 Tagelöhner auf dem Lande	召使 Gesinde	工場労働者 Fabrik- und Manufaktur-arbeiter	手工業の見習及び徒弟 Hand-Verksgeliffen und Lehrlinge
一八一六年	260,000	1,081,596	186,633	19,010
一八四六年	1,100,021	1,127,608	553,553	379,334
一八一六年から一八四六年までの増加率	307パーセント	17.7パーセント	193.04パーセント	193.6パーセント

ブルジョア階級は、政権を掌中におさめ、自己の政治的支配を確立するために必要な新しい憲法の制定、出版の自由、陪審裁判などを要求していた。すなわち封建的の大地主を除く富裕な市民階級——産業ブルジョアジー、商人、中小工業者など——は、何よりも新しい憲法、従って近代的な議会制度を熱烈に欲求していた。また一方労働者階級はひどい低賃金と劣悪な労働条件によってその生活は極度に窮乏し、社会主義と共産主義の学説のなかに自己の解放を求めていた。

従って革命の第一段階はまず封建的な勢力に対するブルジョア及び小ブルジョア階級と労働者階級の共同の闘争としてはじまった。

ドイツ三月革命における労働者階級の役割

は名ばかりで高利貸の搾取に苦悶していた。第三に封建的小作人であるが、彼等は領主の土地を耕すかわりに、代々、一定量の労役をはたさなければならなかった。最後に農業労働者がいたが、これはまた複雑な構成をなしていた。オーベルマンによれば、(A)召使および雇人(Diensteute oder Feldgesinde)、彼等は土地をもたず、領主にたいして契約的な雇用関係にあり、その仕事は、領主の家屋敷および耕地に限られ、彼等の身分そのものは多かれ少なかれそれに結びつけられていた。その代り彼等は小さな庭のある住居をもち、一定の賃金をえていた。(B)小屋住みおよび日雇い(Einlieger und Heerlinge)、彼等は、家も土地もたず、また一定の雇用関係も結ばず、家を借りて住んでいたため、生きるために何らかの仕事がさがさなければならなかった。

以上は、一八四八年のドイツにおける階級関係を、エンゲルスとオーベルマンの説を参照しつつ要約したものであるが、革命以前の労働者階級の構成を表にあらわしてみよう(数字は、Obermann: 9, 28に掲げられたもの)。

次の表から明らかな如く、一八一六年から一八四六年までの三〇年間に於いて、工場労働者の数は飛躍的に増大しつつあったとはいえ、農業労働者の数に比べるならば、ほとんどその三分の一であり、また「ゲジンド」と呼ばれた召使もしくは雇人がかなりの数を占めていたことは注目されなければならない。労働者階級のうちに占める工場労働者の比率が少なかったということが、やがてこのブルジョ

ブルジョアジーは封建的諸制度の圧迫にたいする憎悪と反感から、また勤労階級は一八四七年の恐慌の結果とフランスの二月革命に刺戟されて立ち上がった。三月十三日、ウィーンに暴動がおこったが、やがてベルリンに波及し、軍隊との間に市街戦が行われた。狼狽した国王は、選挙権や出版および集会の自由について譲歩したので、ブルジョアジーは革命の目的が終ったものと考え、むしろ大衆の軍隊にたいする抵抗のほげしき、プロレタリアートの革命的な意識の昂揚に恐怖心をいだいた。パリの二月革命において、労働者階級が革命的勢力として登場し、ルイ・フィリップを追放してフランス共和国を成立させるのに偉大な役割を果たしたという事実、しかもそれに刺戟されて、ウィーンに暴動がおこり、さらにドイツの諸小国の首都にも多かれ少なかれ暴力的な性質の動乱がおこったのを目のあたりに見たとき、ブルジョア階級にとっては、パリの『無政府』の場面がくりかえされる危険がさしせまっていた。以前の意見の不一致はいっさい消滅し、勝利した労働者はまだ彼等自身の独自の要求をなす一つ提出してはなかつたにもかかわらず、この労働者に対抗して多年の敵味方が連合した。そしてブルジョアジーと転覆された制度の支持者たちとのこの同盟は、ベルリンのパリケードからまた煙のきえやらぬうちにむすばれた。カンブハウゼンとハンセマンが組織をひきうけたことによって、第一段階は、ブルジョア階級と封建的勢力との妥協結合をもって終りをつげた。

これについてオーベルマンは、「ドイツ三月革命の闘争における



決定的な力は労働者階級であった。しかし彼等は、十分に発達して  
 いなかったし、革命の指導権を握るほど充分に組織されていなかっ  
 た。それゆえに小市民階級 (Kleinbürger) との共同闘争を必要と  
 したのである。一方小市民階級は、労働者階級の革命的な力を利用  
 しようとした」とのべている (SS, 129-130)。しかし、ここで「決  
 定的な力」, die entscheidende Kraft」といふのは、革命的な  
 闘争のなかにおいてであって、革命全体を動かすほどの勢力であつ  
 たということではないと考えられよう。何故なら、前節でみたよう  
 に、ドイツの労働者階級は前近代的な意識をもつ手工業職人によつ  
 てしめられていたからである。すなわち、小市民階級の数が多く、彼  
 等は国民のもつとも不安定な階層 (der unsichere Bestandteil  
 des Volkes) であり、無教育の国民を代表するのだという自負心  
 と、所有関係の変動にたいする極度の警戒心を抱き (S. 130)、プ  
 ルジョアジーとの利害の対立をおそれるとともに、プロレタリアー  
 トを猜疑し、その革命的な力を恐怖した。たとえば一大消費都市  
 ウィーンにおいては、製造工業は貴族階級や宮廷の消費をめぐら  
 していたため、革命の勃発によって貴族階級が逃亡した結果、その  
 需要が止ったことは商工業者にたいして大きな痛手として作用し、  
 「一方の市民階級とさわざの学生ならびに労働者との間にある  
 冷淡さがうまれた」。このように革命を左右する上で大きな力とな  
 ったのは、第一段階としての三月一八日の革命においては、小市民  
 階級であった。

封建勢力とブルジョア階級との妥協、小ブルジョアの労働者階級  
 への猜疑と利害の対立は、プロレタリアートを絶望と憤懣におとし  
 入れ、さらに革命を第二段階へ発展せしめた。一八四七年の恐慌に  
 よって低賃金と失業にさらされた労働者は、普通選挙権を要求し、  
 パンを求めて、一八四八年三月二三日夜、ベルリンで大会が開かれ  
 た。そして同じ晩、この革命的な状況を憂慮した開明的なブルジョ  
 アジーは、労働者階級の不満を和らげその抵抗を弱めるために、革  
 命の成果を擁護すると称し、政治的なクラブを結成し、生産性向上  
 による賃金の値上げと労働時間の短縮を訴えた (SS, 148-149)。こ  
 れにたいし労働者階級は、三月二六日、一〇、〇〇〇から二〇、〇  
 〇〇人の労働者が賃金値上げを要求して抗議大会を行い、支配階級  
 を文字通り震撼した。プロレタリアートはいまや革命の主なる担い  
 手として登場するに至った。そして彼等は、それを自分たちの革命  
 と見なしたのである。かくして三月二六日以後革命は第三段階に入  
 った。

この時期以後、ドイツの労働者階級は革命の担い手としてたくま  
 しく登場するようになる。一八四八年の終り、マルクスおよびエンゲ  
 ルスは、共産主義同盟本部の名のもとに、有名な「ドイツにおける  
 共産党の要求」 (Forderungen der Kommunistischen Partei  
 in Deutschland) を発表した。それは一七項目から成っていた  
 が、その重要なものをあげるとつぎのようなものがあつた。

(一) 全ドイツを単一不可分の共和国と宣言すべきこと。

- (二) 刑罰をうけたことのない二一歳以上のドイツ人は、すべて選  
 挙権ならびに被選挙権をもつ。
- (三) 国民代表には給料を支払い、労働者もまたドイツ国民議事に  
 議席をもちうること。
- (四) 全国民の武装。
- (五) 裁判は無料とする。
- (六) これまで農民住民の重荷になっていたいっさいの封建的負  
 担、すなわちいっさいの賦課、賦役、十分の一税等は、なんら  
 の賠償なしに廃止する。
- (七) 王侯その他の封建的領地、すべての鉱山、炭坑等を国有にす  
 ること。それらの領地では、農業を国民全体の利益のために、  
 大規模かつ最新式の方法をもって経営すること。
- (八) 最初の七項目だけあげたが、それ以下の項目においてマルクスお  
 よびエンゲルスは、銀行の国有化をはじめ、鉄道、運河、汽船、道  
 路、郵便等の国有化を主張し、また教会の国家からの完全な分離、  
 相続権の制限や消費税の撤廃および高度の累進税の実施、あるいは  
 国民教育の無料実施や国営工場建設などを要求している。

これは共産党宣言の理論を一層発展させたものであり、マルクス  
 およびエンゲルスはこれらの諸政策の貫徹に全力をつくすことこ  
 そ、ドイツのプロレタリアートと小ブルジョア階級および農民の利  
 益であることを強調しているが、プロレタリアートはこれをいかに  
 して迎えたかといえ、封建的な体制に緊縛されていた農民および

農業プロレタリアートは、他の社会階層との間にはほとんど何の関係  
 もなく、とりわけ労働条件の改善や政治的な権利獲得のために闘う  
 産業プロレタリアートとの間には、大きな隔絶が見られたことであ  
 る (SS, 159-160)。さきの表においてみた如く、ドイツの工業労  
 働者の数は農業労働者に比較してはるかに少なく、また中小工業  
 者のしめる比重がきわめて大きかったことが、革命的イデオロギ  
 の伝播を阻害したことが考えられよう。その結果、革命的なマルクス  
 主義と並んでそれを否定するかのような日和見主義例えば労働者の  
 運動を経済的な要求のなかにとどめておこうとする経済主義や労資  
 協調主義が浸透し、その反対に空想的な思想や手工業的な理論が労  
 働者階級を支配する結果となった。シュレフェル (G. A. Schöfel)  
 は、バブーフの影響をうけた小ブルジョアの空想的社会主義者であ  
 り、また黎明期のドイツ労働組合運動に指導的な役割を果したシュ  
 テファン・ボルンの如きも、空想的社会主義者ではなかったとはい  
 え、結局は社会改良主義者であり、小市民的手工業者的イデオロギ  
 ーを清算するまでには至らなかつた (SS, 171-172)。その結果、ドイ  
 ツ革命は第三段階に入つて労働者階級の革命的なエネルギーを期待  
 したにもかかわらず、これをもってブルジョア革命を徹底させるこ  
 とができなかつた。すなわち、一八四八年十一月、反革命陣営は攻  
 勢に転じた。われわれはつぎに三月革命の終幕ともいふべき民主的  
 選挙権闘争において、労働者階級の果たした役割についてふれるのが  
 順序であるが、これについてふれる余裕がないので、最後にこの革命

が、労働者階級の運動にたいしどのような意義をもっているか、この点についてオーベルマンの主張を要約して本稿を終りたいと思う。

「ドイツのプロレタリアートは、一八四八年から一八四九年のあらゆる闘争の前面に立って、一貫して民主主義のために闘った。しかしながらその力は、農民や小市民を指導するのに充分ではなかったし、従ってドイツのブルジョア階級は、反革命によって革命を裏切ることができた」と(9. 88)。まことにドイツ三月革命の失敗が、封建的貴族階級と妥協した大ブルジョアの裏切りであることはいうまでもないが、それよりも、前近代的な意識をもつ広汎な中間層としての小市民階級と農民が、工業プロレタリアートと緊密な統一行動に出なかつたことに由来していた。従来の革命史にみられるように、労働者階級の旺盛な戦闘的革命的な精神を強調し、ブルジョア階級の裏切りを説くだけでは充分ではない。この二大階級の間にあって浮動する小ブルジョア階級の役割と前近代的意識に眠る独立小生産者および農民をいかに把握するか。結局、革命の帰趨を決定する重大な要素はこれである。この意味で、レーニンがその「二つの戦術」の結論につきのようにのべているのはまことに教訓的である。『ドイツの民主主義革命においては(一八四八年当時において)、経済的にも政治的な点でもおかれていた——国家的な分裂によって——ために、運動のプロレタリアの特徴、プロレタリア的な潮流が、一九〇五年のロシア革命よりも、はつきりとあらわれなかつた』と。そして再びオーベルマンはつぎのようにいう。「ドイツのプロ

レタリアートは、農民および民主的な小市民と同盟して、国民運動の指導権をうけつぐことができるために、自主独立の労働者党をつくり出さなければならなかつた……。自主的な労働者党の建設をめぐる闘争は、まず第一に、科学的社会主義の教義の普及と確立のために、労働者の戦列における小市民的なイデオロギイにたいする闘争であつた」と(9. 88+89)。小ブルジョア階級を味方にひきいれながら、同時に小ブルジョア的なイデオロギイに闘いをいどみこれを克服すること、オーベルマンによればこれこそ一八四八年の革命において労働者階級が学んだ偉大な教訓であつたといふのである。ひとり一八四八年の革命のみならず、その後の革命運動の歴史において、あたえられた困難な状況のなかで、この教訓がかえりみられなかつたことがあろうか。

- (1) エンゲルス「革命と反革命」邦訳二八—二九頁。
- (2) 右掲書、五九頁。
- (3) 右掲書、五四頁。
- (4) マルクス・エンゲルス選集、第二巻、四四三—四四頁および四五—四九頁。

——一九五八・四・一五——

「オーベルマンの著書を通じて、ドイツ三月革命の全貌を把握しようとした筆者は、準備不足のため所期の目的の半分も果すことができなかった。その徹底的な究明については、後の機会にゆずる」

## J・L・シュミットの恐慌理論

——戦後景気循環の体系的研究の一齣——

### 常 盤 政 治

〔一〕

第二次世界大戦後の資本主義の発展と景気循環の特殊性について「経済の軍事化」を骨格として説明しようとする教条主義的見解に対する批判として、アーノルド・バーマンの劃期的労作が発表されて以来、戦後景気循環の特殊性についての再検討がはなはしく行われてきたことは周知の如くである。わが国においても、名和統一氏によって「大胆な問題提起」がなされ、戦後景気循環の特殊性に関する問題は「資本主義の運命を決する鍵」として最近特に論議の対象となった。

バーマン名和論文は、戦後資本主義の発展と景気循環の特殊性にかんする教条主義的偏向についての批判としては高く評価される<sup>(1)</sup>つも、完全には同意できないことが多い論者によって表明せられて<sup>(2)</sup>いる。さりとて、これを批判する側も、必ずしも体系的でなく、ややもすれば教条主義的論旨を再強調するにすぎないか、せいせい、

バーマン名和論文の論調のゆきすぎを指摘し、その戦後景気循環の変形を規定した「特殊な諸要因」の皮相的羅列を非としているにすぎないように思われる。総じて、戦後景気循環の特殊性を規定している諸要因について、従来多くの労作がとりあげてはいるが、「それら諸要因の本質及び作用についての体系的な研究は今日未だ欠けている」と言っている。

そこで、かかる「広大な課題を実現するためのささやかな寄与をなそう」として、先きに注目すべき労作「Neue Probleme der Krisentheorie」, Akademie-Verlag, Berlin 1956. を発表した Johann Lorenz Schmidt が、最近その具体化の一齣として、「Über die besonderen Factoren der zyklischen Entwicklung im Kapitalismus nach dem zweiten Weltkrieg (Konjunktur und Krise, Akademie-Verlag, Berlin Heft 1. 1957, Ss. 3-24.)」なる一論を草しているの<sup>(3)</sup>で、ここに訳出紹介して、戦後景気循環の体系的な研究のための一資料に供したいと思う。なお、J. L. Schmidt